

學小

日本修身書

尋常科  
生徒用

卷三

檢定申請本



K120.1

31

3

稲垣千穎編述

# 小日本脩身書

東京 成美堂發兌

小日本脩身書卷三



稲垣千穎編述

孝行

紀伊國のあるのう  
ふの家にかひう鶏  
やまひにかかりて  
眼みはすなりける  
に、その子鳥はつね

小日本脩身書 卷三

成美堂發兌

稲垣千穎編述

# 小日本修身書

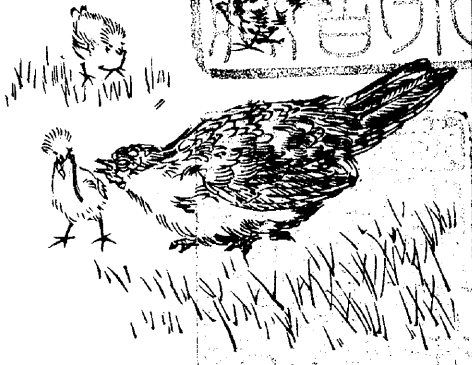
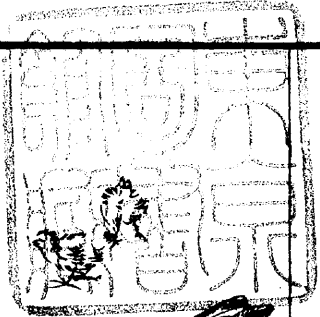
東京 成美堂發兌

小日本修身書卷三

稲垣千穎編述

孝行

紀伊國のあるのう  
ふの家にかひ一鶏  
やまひにかかりて、  
眼み江すなりける  
に、その子鳥は、つね



小日本修身書

卷三

成美堂藏版

親鳥のかたはらをはなれず、こくも  
 つ、むしるゐ、などひろひ来て、よく親鳥  
 をやいなひけるどぞ、こころなきとり  
 でさへ、親のくるしむをみては、これを  
 いたはりやいなふこと、かくのごとし、  
 人はみをつつしみて、親をたいせつに  
 すべきなり、  
 人ヲ以テ鳥ニシカサルベケンヤ。



養親

清七とて、きこりを  
 業とする者あり、其  
 の母、初富める商人  
 の乳母たりしゆゑ、  
 口、美味になれて、あ  
 じき食物をいどへ  
 り、清七心をつくり

小田原...  
 成美堂...

て、朝は人に先たちて、山にいら、夕は人  
 にたかれて、家にかへり常に人に一陪  
 せる、薪をとり来り、これを市にうりて、  
 そのあたひを二に分ち、一は、母の常の  
 もとめにそなへ、一は、その時ならぬも  
 とめにあて、身をつつみ、つひにをは  
 おきて、母にふどゆうをかけざりき、  
 人ノ子トシテハ孝ニトドマル。



友愛

肥後の熊本に、七左  
 衛門、彌左衛門、九兵  
 衛とて、兄弟三人あ  
 り、各別に家をもち  
 たれども、同所  
 軒をならべて、一家  
 の如く相親み、兄弟

心をあはせて、奢オホシをきんど、儉約ケンヤクをまむりて、商業シヤウケフに力を盡ツクし、父母の墓ハカにまうづるにも、共トモにうちつれだち、まれに家にて、酒サケなどのむ時は、各オノオノいささかの物たづさへ来り、三人一所イツシヨにより集りて、たのしみけり、のち此コトの事官クワンに聞キ江て、  
 錢若干ゼニソコバツをたまひて、賞シヨウせられけるどぞ、  
 兄弟イクラカハナハタオモフ。



友悌

遠江國山名郡田村トホタマナノタムラに、太四郎といふ者あり、其の弟は、一里半ハジばかりはなれたる、ある村人の養子ヤウシとなりければ、同オナド村内スエに分家ブンケせる、未

の弟と共に親を養へり、此の三人、相睦  
 しくして、毎月二三度づつは、必往來  
 て、其の安否をとひ、親にもつけて、其の  
 心をよろこはせ、も一十日あまりも、た  
 とつれなき時は、いかに農事のいそが  
 しきをりにて、必相たつぬ、其のぶド  
 なるをみて、上なきたのしみとせり、  
 兄。兄タリ。弟。弟タリ。



節操

備前國岡山の人、湯  
 浅元禎の母瑠璃は、  
 瀧某の女にて、湯浅  
 英に嫁して、元禎を  
 うめり、英年老いて、  
 病にかかりけるに、  
 瑠璃、日夜其の側に

小田原家

五 成美堂藏版

ありて、心を盡し、何事も夫の心にたがはず、六年の間、一日の如くかゝりつき、英  
 みまがりて後は專我が子の教育に心  
 を用ひ、家事の暇には好みて和漢の貞  
 女節婦の傳をよみ、奢をにくみ、費をは  
 ぶき、人のまづきを見ては、之に施し  
 あたふるを以て、上なき樂としたり、  
 貞女ハリヤウフニマミエズ。



貞順

紀伊の人、松本定章  
 の妻孝女、よく舅姑  
 と夫とに事へ、家法  
 を守りて、儉約をつ  
 とめければ、其の家  
 さして豊なるには  
 あらぬども、一も不



自由ジユなく、一家睦ムツくくして、暮クけり、舅  
 姑世コトをさり、夫にもたかれて後は、常に  
 男の子には公キミを先にして、私シを後にし、  
 君キミの為タメ國クニの為タメに、力をつくすべき事を  
 をしへ、女の子には心をすなほにして、  
 よく父母舅姑夫につかへ、儉約をつと  
 むるを以て、職シヨクとせよとさとしけり、  
 女ハ貞順ヲ徳トス。



信實

木下貞幹、其の門人  
 新井君美の學徳日  
 にすすむを愛して、  
 加賀侯ガガに薦めんと  
 せり、君美の同門ドウモンに、  
 岡島某オカジマといふ者あ  
 り、もと加賀の人な

り、此の事をききて、君美の家に至り、余が國の母より、余に歸れとすすむる書狀、たびくに及べり、余之を讀むごとに、恩愛の情たさへがたし、君希くは、同門の好を以て、余を師に薦めて、加賀侯に仕へしめてよ、と云ひければ、君美之を憐み、直に師にこひて、己に代らしめぬ、師ヲタフトビ。友ヲシタシム。

### 推己

もしここに、惡き童子ありて、汝に向ひて偽をいはば、汝は、かならず、彼にあざむかるるを、快くは思ふまじ、故に汝も、朋友に對して、決して偽をいふべからず、もしまた人ありて、汝をののしらば、汝はまた、かならず、彼にののしらるるを

快くは思ふまじ、故に汝も人に對して、  
決していかりののしる ことあるべか  
らず、

かくの如く、すべて、汝の心に、快いとせ  
ざることは、人もまた好まざることと  
思ひて、必ずべからず、

己がホツセハル所ハ。人ニホドコス  
コトナカレ。

謹慎

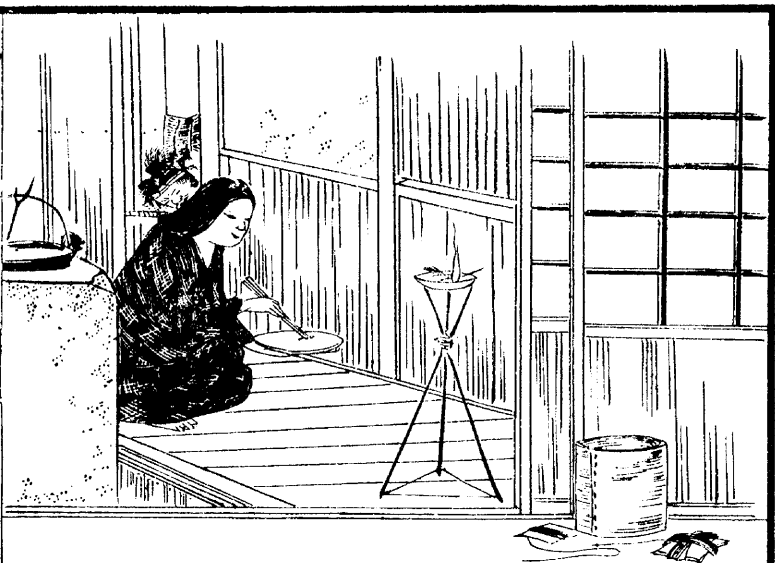
人より問はるることあらば、知りたる  
ことは、知りたりとことたへ、知らぬこと  
は、知らずと答へよ、

人とはなしする時は、ていぬいにせよ、  
かりそめにも、ふれいなることは、を、つ  
かふべからず、

人のはなしする時、かたはらより、さし

でぐちすべからず、人のことはを、笑ふべからず、人の口まぬをすべからず、はやことは、人ききとりにくし、さりごと、あまり遅きも、よろしからず、ととはのつがひめに、エー、またマノーなどいふことを、なるべく入れぬやうにせよ、

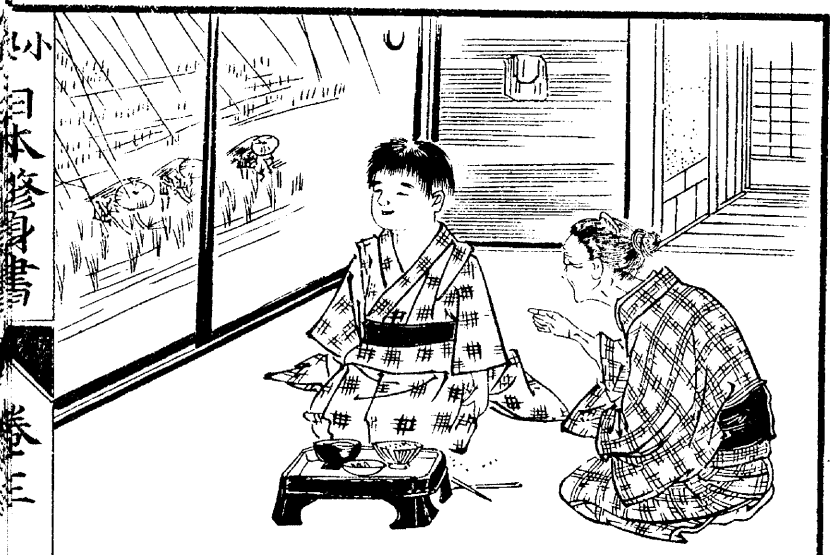
コトバヲエラベバ、ワザハヒナシ。



禮儀

ある夜、盜賊、貧しき家の勝手口より、中を伺ふに、一人の若き女、竈のもとにて、粥を煮つつ、鍋の蓋の裏に、粥粒をのせ、さい箸にて、煮江た

りや否イナやを、潰ツブし試シみ居イたるに、奥オクの方より、舅シヤウらーき老人の、はや煮ニ江エたり也、と問コトふ聲コエせり、盜賊コウ之ノをみて、此コノの女メは、今舅イマニにすすむる粥カを、己ミが口クチにては試シみず、人の見ぬ所ミにては、親子コノの禮レイをみたまさず、かくやさーき人の物は、我ワらは取るに忍シびずとて、立ちさりけり、  
 人禮ニアレバ。タフトシ。



儉約

ある小兒シヨウ、食シヨク事コトするに、菜サイの心ココロにかなはずとて、箸ハシをなげ、飯メシをちらーけれは、老ラウ姫ヒメ襖フスマをさーて、これハ、何ナニの畫エぞと問トへは、小兒シヨウは、田植タケの所トコロ

なりと答ふ、老嫗は、然らば、汝にきかす  
 る事ありとて、種タネをううるより、苺カキ取る  
 までの、農夫ノウフの辛苦シンクをつぶさに話ハナし、之  
 を思へは、一粒ヒトツブの飯イチリクも、たろそかにすべ  
 からず、まヒトツブしてうち散チラして、よからんや  
 といひければ、賢カシコき小兒コエにやありけん、  
 さとりがほに、うなつき、つつ、食事せり、  
 粒粒リクリクミナ辛苦。



質素

綾部道弘アヤベミチヒロといひ、  
 人、常に儉約をまゐ  
 りて、くわびのこと  
 をよろこばず、ある  
 人、其の子に美服ビフクを  
 たくりけるに、道弘、  
 これを著キることを

ゆるさずして曰、吾が父母は、一生まづ  
 一くして、世をさりたまひぬ、吾、多年の  
 辛勞によりて、今幸に俸禄をたまはり  
 て、子女をもやいなふことをうるは、こ  
 れみな、父母の惠なり、たよそ人は、儉約  
 を守るは難く、奢るはやすし、吾がねご  
 りに習はしめざるは、兒を愛するなりと、  
 家ヲ夕モツ道ハ、勤ト儉トニアリ。



仁惠

天明八年、出羽國き  
 きん甚かりに、  
 鶴岡の人、鈴木宇右  
 衛門夫婦力を盡し  
 て之をすくひ、こと  
 に其の妻は、衣服一  
 枚を残し、餘はこと

ごとくうりはらひ、其の代もて、多くの  
 人をすくへり、其の翌年の春、十二三は  
 かりなる少女の、饑ゑつかれ、身には、也  
 ぶれたる單衣一をまとひ、門に立つを  
 見て、宇右衛門の娘の、十二歳なるが、上  
 に著たるよき衣をぬぎて、恵み與へけ  
 り、親子とも、慈悲ふかき人といふべし、  
 善ハヒビニ行フベシ。

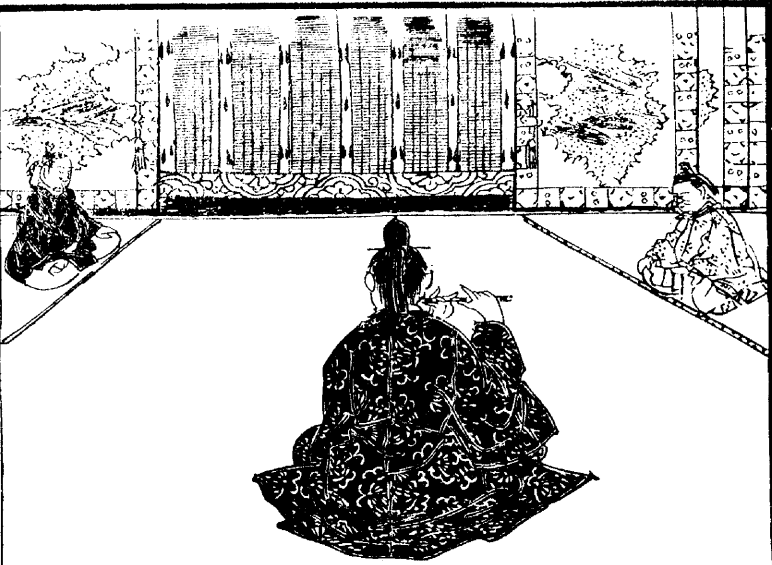


惠恤

東京、浅草、聖天町の、  
 人力車夫、母のやま  
 ひの、くすりの代の  
 ために、營業にもち  
 ふるきやはんをもち  
 質入しければ、せん  
 かたなくて、雨の脛



を墨スミにてそめ、街ナマクにうづくまりて、客キヤクを  
 まちゐたり、をりふ、ジュンサトヲ巡查通りかかり、  
 あやみて、其の故をどひ、あはれみて、金  
 五十錢を、出、あたへければ、車夫は、い  
 そぎ質屋シチヤにゆきて、きやはんをとりか  
 へり、残コリの金を返して、恩オンを、やける  
 に、巡查は、之をとりずして、たちされり、  
 恩ヲホドコシテハ。報ヲモトメズ。



才藝

かほかたちみにく  
 き人む、才藝サイゲイの徳に  
 よりては、うるはし  
 くもみゆるものな  
 り、昔村ムラカミ上天皇のみ  
 よに、藤原朝成フナハラノトモナリとい  
 ふ人、笛をよくふく

よし聞江て、内裏ウチノミヤにめされけり、天皇、も  
 のかけよりごらんするに、いかにも醜みにく  
 かりければ、いとほしくたほしけり、さ  
 て程なく、笛をふきけるに、その音うる  
 はしくして、内裏もひびくはかりなり  
 ければ、先の醜かりしすがたも、何と  
 なく、うるはしくみ江けるとぞ、  
 人藝アレバ、オノツカラ貴シ。

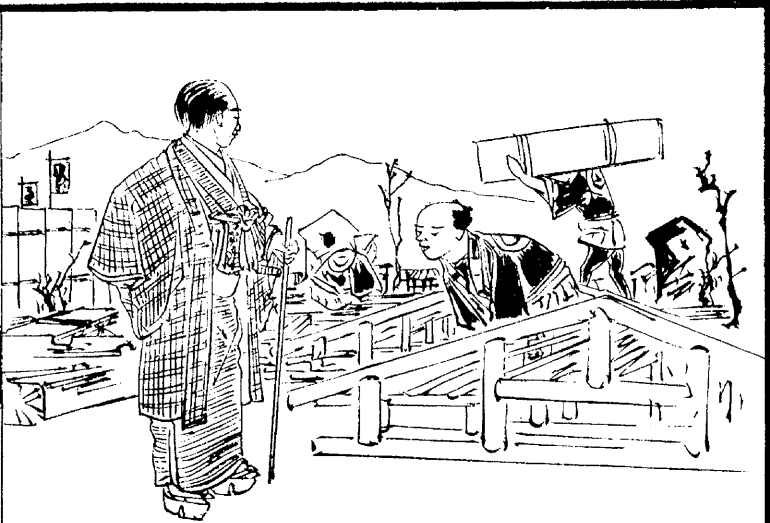


敬事

昔ムカシ、運慶ウンケイといふ、名高  
 き佛師ブツシ、佛ホトケをきざむ  
 でんドゆとて、弟子アシ  
 にいひけるは、はド  
 め、耳ミミと鼻ハナとは大く、  
 目と口とは、小くつ  
 くりわきて、しだい

に、よきやうに直すべし、もしく初より、みなよきほどにすれば、目と口とは、大きすぎたればとて、ふたたび小くすることあたはず、鼻と耳とは、小さすぎたればとて、また大きくすることあたはざれば、つひにぶかつかうのものを造るにいたるなりと、

始ヲツツシニ。終ヲオモンパカル。



慈善

豊後國府内の醫、高島玄俊といふ者、儉約をまもりて、人に施すことを好めり、明治二年、米の價貴くして、うゑにせまる者多かりければ、

玄俊、わが家を質入し、又同志の者にもつのりて、金五千兩をととのへ、米をかひて、市中の者に施し、又三年には、府内大火ありしに、玄俊、また、金二千五百兩をつのり、百戸ばかりたてつらぬて、家をらしをひたる、貧しき人にかしあたへしなど、陰徳多かりし人なり、

己ヲ損シテ人ヲ益ス。

### 容儀

かたちは花にて、心はたぬなり、たぬのよしありは、花のびあくによりて、知らるるものなれば、心の善をあらはさんと思はば、かたちを正しくせよば、ある可らず、よろぎ正しく、たもたもしき者は、人品たのづから貴く、かたち卑しく、さわがしき者は、人品たのづから賤

一、ようきは、常に正しくつくべし、  
 もちくづりたる、あじき習<sup>ナラヒ</sup>あれば、には  
 かに改<sup>アラタ</sup>むることあたはずして、大に苦<sup>クルシ</sup>  
 むものなり、すべて人の賢<sup>ケン</sup>愚<sup>ヌ</sup>は、かた  
 ちにて知らるるものなり、愚<sup>カシキ</sup>なる兒は、  
 常に顔<sup>カホ</sup>をけがし、髪<sup>カミ</sup>をみだし、賢<sup>ケン</sup>き兒は、  
 いつも面<sup>オモテ</sup>目<sup>メク</sup>きよく、衣服<sup>イフク</sup>さはやかなり、  
 假<sup>カ</sup>ニモ不行<sup>コウ</sup>儀<sup>ギ</sup>ノ體<sup>テイ</sup>ヲスベカラズ。



忠節

稱<sup>シヨウトク</sup>徳<sup>テ</sup>天皇<sup>テンノウ</sup>の御<sup>ミ</sup>時<sup>トキ</sup>僧<sup>ソウ</sup>  
 道<sup>ダウ</sup>鏡<sup>キョウ</sup>を<sup>シテ</sup>天<sup>テン</sup>位<sup>イ</sup>に  
 つか<sup>ツ</sup>か<sup>カ</sup>しむ<sup>ム</sup>べ<sup>ベ</sup>と<sup>ト</sup>宇<sup>ウ</sup>  
 佐<sup>サ</sup>八<sup>ハチ</sup>幡<sup>マン</sup>宮<sup>ミヤ</sup>の、た<sup>タ</sup>ん<sup>ン</sup>つ  
 け<sup>ケ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>よ<sup>ヨ</sup>し、い<sup>イ</sup>つ  
 は<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>て、そ<sup>ソ</sup>う<sup>ウ</sup>も<sup>ム</sup>ん<sup>ン</sup>す  
 る<sup>ル</sup>もの<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>け<sup>ケ</sup>れ<sup>レ</sup>は、

和氣清磨をちよーどー、宇佐につか  
 はして、神慮をうかがはしめたまふ、清  
 磨かへりて、わが國は、天地のはじめよ  
 り、君臣のぶんさだまれり、ぶだうのも  
 のは、はやく誅すべーと、たんつけあり  
 ーよー、そうめんーければ、道鏡これに  
 よりて、きゆの心をやめたり、  
 君ニツカフルニハ、忠ヲ以テス。



忠君

天長節は、今上天  
 皇御たんどやうの  
 日にて、紀元節は、  
 今より二千五百五  
 十餘年のむかし、其  
 の御先祖なる、神  
 武天皇の御位につ

きたまひー日なり我等が、今上天皇の御めぐみを、あうむるごとく、我等の先祖も、其の時の 天皇の御めぐみを、かうむりーものなれば、我等は、天長節と紀元節とを、謹んで祝ひ奉るべきは、言ふに及ばず、常に御代御代の 天皇の御めぐみをわするべからざるなり、**忠ヲ以テ君ニ事フルハ。臣ノ道ナリ。**

小 學 日本修身書卷三 終

明治二十五年五月一日印刷  
 明治二十五年五月五日出版

定價金五錢五厘

著作者

稲垣 千穎

發行兼  
 印刷人

三浦 源助

版權

發賣所

成美堂支店

發賣所

石井 鈎三郎

東京市日本橋區本町壹丁目  
 大坂市東區備後町四丁目

